

# 草庵仏教

第212号  
(発行日)

2008年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会――毎月2日と

12日。午後7時より。

\*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 怒りと歡喜光

親鸞聖人は阿弥陀仏の徳には歡喜光の徳があり、それは阿弥陀仏が法蔵菩薩として修行されて得られた光であつて、歡喜光は「よろづの有情の瞋恚・憎嫉の罪を除きはら

はんために得たまへるひかり」(『弥陀如来名号徳』)である

と仰せられている。歡喜とはまことの喜びである。だけれども喜びを求めているが、たいていは外のものとか相対的なものに喜びを求めている。富や名声や愛のある人間関係や健康や娯樂などを得ることによって喜びを得ようとしている。

確かにそれらを得ることは喜びに違いない。しかし、そうしたものは老病死の憂苦を免れることはできない。すべて人は「老いゆくものである」(滅びゆくもの)であるといふ人間の限界を超えることはできない。死の影は榮華を極めていている者の上にもいつもおとずれている。ゆえに人生に

は憂苦が根に張りついている。憂苦がつきささっている者には眞の歡喜はない。心からの満足はなく、あるのは死への根本的な憂苦への氣晴らしであろう。

しかるに南無阿弥陀仏の光にあうものは阿弥陀仏に攝取され、そこに初めて純なる歡喜が起る。

歡喜というのは、嬉々としているという心理的な感情というよりは、現実の人間生活において、人生への安定感とか満足感として經驗されよう。

こうして、弥陀に攝取された満足感(歡喜)は、「よろづの有情の瞋恚・憎嫉の罪を除きはら」うという功德があるので、と聖人は仰せられるのである。すなわち、弥陀の光にあるものは、歡喜光の徳をいただくゆえに、現実の生活の中で瞋恚の罪が除かれていくと仰せられているのである。

歡喜の反対は瞋恚である

\*

が、瞋恚はいろいろな形で人間生活の上に現出してくる。仏教の教説では、瞋恚は忿・恨・惱・害・嫉という五つの随煩惱という形をとって出てくるといわれている。

〈忿〉とは、自分の心になわぬ事にたいしていきどおること、思いどおりにならないとカツとなって腹を立てることである。〈恨〉とは腹立たしい気持ちをいつまでも忘れずに持ち続けることである。〈惱〉とは現状にたいして不満をもつことである。今の生活に不足を感じてうつうつとして居ることである。

〈害〉とは他者にあわれみがないことである。〈嫉〉とは〈不耐他榮〉の心といわれ、他の榮譽にたえられないこと、他の榮譽がうとましいことである。

\*

まず、〈惱〉という現実の人生に対する不満や不足があるという、そういう怒りがあると、思い通りにいかないことに対して腹立たしくなる、これが〈忿〉であろう。そして「あの人のせいであまくいかない、損をした」などと人を恨む心がいつまでも心に結ばれてほどけない。これが

〈恨〉である。

また現状に対して〈惱〉という不満があると、周りの人にたいするやさしさに欠けてくる。言葉も荒くなり、人をよく責めるようになる。それが〈害〉である。他者に冷たくなるという(嫉)の怒りが増大してくる。

こういふ忿・恨・惱・害・嫉という瞋恚の連鎖がどこで断ち切られていくかという問題に、応えてくださっているのが弥陀の光明の徳であり、なかなしく歡喜の光であろう。

怒り心の根は人間心の基本的なところに下ろしている。それは娯樂や世間的な榮譽を得ることによっては除かれない。逆にそうしたものが得られないとますます強まるものである。

それは、阿弥陀仏の光にあつて人生そのものに喜びが生まれ、それによって人生に満足が与えられて、はじめて瞋恚の煩惱がやわらいでいくのである。

(了)

# 正信偈に学ぶ問答

## (一)

(親鸞聖人の言葉)

しかれば大聖の真言に  
帰し、大祖の解釈に關し  
て、仏恩の深遠なるを信知  
して、正信念仏偈を作りて  
日わく、

帰命無量寿如来  
南無不可思議光

現代語訳(こうして私は大聖  
釈迦牟尼仏の真実の言葉にし  
たがい、浄土の祖師方の注釈  
を拝読して、阿弥陀仏の之恩  
を深く蒙っていることを知ら  
せていただいたので、正信念  
仏偈を作って仏祖の恩徳に応  
えたいと思います。

無量寿如来に帰命し、不可  
思議光に南無したてまつる)

\*

A 「正信偈は帰命無量寿如来  
からはじまりますが、誰がお  
作りになったのですか」

D 「親鸞聖人の作られた宗教  
詩で、七言が一句になってい  
て百二十句あります。そして  
この詩は聖人の畢生の大著で  
ある『教行証文類』の中の行

巻の最後に置かれています」

A 「なぜこのような詩をお作  
りになったのですか」

D 「阿弥陀如来様のご恩の広  
大にして深いことを感じ、仏  
祖のご恩に少しでもお応えし  
たいとお心からお作りにな  
ったのであります」

A 「聖人自身が正信念仏偈と  
いう題名を付けておられます  
が、この題はどういう意味で  
すか」

D 「まず偈とは詩とか歌とい  
う意味です。正信念仏とは  
(本願を) 正信し念仏する」  
とも(本願の) 念仏を正信  
する)とも読み下されますが、  
意味は同じでしょう。本願と  
は弥陀の第十八願であり、正  
信とははからいをさしはさむ  
ことなく信じてことです」

A 「正信念仏偈と正信偈とは  
ちがうのですか」

D 「同じです。聖人は自らの  
制作された正信念仏偈のこと  
を正信偈とも呼んでおられま  
す」

A 「いつ頃から正信偈の勤行

がなされるようになったの  
のですか」

D 「本願寺の八代目の  
住職で、真宗の中興の  
祖といわれる蓮如上人  
(一四一五から一四九

九)の頃からです。上人は僧

侶も在家の人と一緒に勤め  
ができるようにと、正信偈に

三帖和讃を加えて印刷し、配  
布されました。それまでは、  
晨朝のお勤めは、僧侶が(往  
生礼讃)をあげるだけで、一

般の人々はお勤めが出来ませ  
んでした。しかしそれでは出

家・在家のへだてなくお救い  
くださる浄土真宗の教えを説  
く勤行にふさわしくないと考  
えられたからです。それ以後、  
今日まで正信偈和讃の勤行が  
続いているのです」

A 「正信偈で聖人は何を表さ  
れようとされたのですか」

D 「正信偈は先に申しました  
ように教行証文類の中の行巻  
の最後に置かれています。正  
教行証文類の全体を一篇の詩  
に要約したもので、浄土真宗  
の教えの全てが極めて密度の  
高い表現内容をもって作られ  
た詩です。そして正信偈の内  
容は大きく二段に分かれてい  
ます。前半は依経段といい、  
釈尊が説かれた無量寿経によ

って阿弥陀仏の本願の救いに  
遇えた慶びを述べ、後半は依  
積段といって、この無量寿経  
の正意をインド、中国、日本  
と、三国にわたって伝承して  
こられた七人の高僧たちの徳  
を讃えられるのです」

A 「依経段と依積段はどこか  
らどこまでですか」

D 「依積段は、初めの帰命無  
量寿如来から難中之難無過斯  
までです。依積段は印度西天  
之論家から最後の唯可信之高  
僧説までです。なお依経段の  
最初の二句である帰命無量寿  
如来 南無不可思議光は、正  
信偈の全体をまとめるような  
意味をもち、阿弥陀仏に帰依  
する信心と、甚深の敬意を表  
す帰敬の頌でもあります。つ  
まり正信偈の全体が阿弥陀仏  
の救いに信順する詩であると  
いうことを最初に表されたの  
です」

\*

A 「では帰命無量寿如来 南  
無不可思議光のお心をこれか  
らお話し下さい」

D 「聖人はこの二句に、阿弥  
陀仏の基本的な働きを光明  
(ひかり)と寿命(いのち)  
で表されました。ひかりとい  
のちこそ、阿弥陀仏の根本的  
な本質(功德)でありましょ

う。無量の寿命であり無量の  
光明の徳用を阿弥陀仏といっ  
ていいのであります」

A 「光明無量と寿命無量は無  
量寿経にできますね」

D 「そうなんです。弥陀の四  
十八願の中の第十二願に

たとい我、仏を得んに、光明  
能く限量ありて、下、百千億  
那由他の諸仏の国を照らさざ  
るに至らば、正覚を取らじ。  
(わたしが仏になるとき、光  
明に限りがあつて、数限りな  
い仏がたの国々を照らさない  
ようなら、わたしは決してさ  
とりを開きません)

とあつて第十二願を光明無  
量の願といい、第十三願に

たとい我、仏を得んに、寿命  
能く限量ありて、下、百千億  
那由他の劫に至らば、正覚  
を取らじ。

(わたしが仏になるとき、  
寿命に限りがあつて、はかり  
知れない遠い未来にでも尽き  
ることがあるようなら、わた  
しは決してさとりを開きませ  
ん)

とあつて、第十三願を寿命無  
量の願といわれています。こ  
れは法蔵菩薩の誓いの形で述  
べられています。阿弥陀仏  
の本質を明瞭に表された言葉  
だといえましよう」

## 雑記帳

仏教学者の羽矢辰夫氏の著『ス

ツタニパータ』に現代、日本人のほぼ共通な人生観を簡潔にまとめ「わたしの人生は一回だけで、死んだら終わり。だから生きているうちに、楽しいこと、心地よいことをするしかない。わたしが幸せになることが、人生の目的である。」と書いている。しかし、このような現代人の人生観で人生が全うできるかというと、むしろむなしさと悲劇が待ち受けていると思う。その悲劇とは「死は一切の終わりである。無になる」という死がかならず最後に待ち受けているということである。

こういう時代に「死んで浄土に生まれさせていただけろ」ということを真宗の流れにいる私たちが受け入れていることは我ながら不思議と思う。そして非常に有難いことだと思ふ。そう信じれることが不思議である。先人が「お育て」といわれたのはこのことであろう。若い時から納得できないことはとことん受け入れず、理屈をいい、疑問があれば容易に相手のいうことに妥協しない私が、ただ単純に「我が浄土に生まれさせる」という仏のみ言葉を幼子のように信じ

**A** 「こういう仏になりたいという誓いによって、仏の本質を露わにされるのですね」  
**D** 「ええそう思います。そしてそのことは阿弥陀仏の原語に帰ってみればさらに明らかになります」  
**A** 「阿弥陀仏の原語はどういう言葉ですか」  
**D** 「インドのサンスクリット語で、アミターバとアミターユスという言葉です。それを中国語で阿弥陀と翻訳されてきたのです。なぜかといえば、最近の研究では、サンスクリット語のアミターバの語尾の〈バ〉とアミターユスの語尾の〈ユス〉が、俗語風に発音されると音が落ちてアミダとなり、阿弥陀と漢訳されたのであろうといわれています。例えば〈ブツダ〉は仏陀と訳されていますが、仏という一語で訳される場合があります。それは仏陀を省略して仏と訳したのではなくて、ブツダというサンスクリット語の発音が俗語では語尾の〈ダ〉が落ちてフツと発音され、その発音が漢訳されて〈仏〉と訳されたといわれています」  
**A** 「ではアミターバとアミターユスの翻訳では阿弥陀でいいのに阿弥陀仏と仏がついて

いるのは何故ですか」  
**D** 「それは中国の訳経僧が翻訳の際に付けたのですね」  
**A** 「アミターバとアミターユスの意味は何ですか」  
**D** 「アミターバは無量の光明あるもの、アミターユスは無量のいのちあるもの、という意味です。いわば光明無量・寿命無量それを阿弥陀というのです」  
**A** 「では、正信偈の無量寿如来は寿命無量の徳で阿弥陀仏を表されているのですか」  
**D** 「そうです。また不可思議光という名は阿弥陀仏の光明無量の仏徳から表されたものです」  
**A** 「では帰命はどういう意味ですか」  
**D** 「帰命にはいろいろな意味があります。ここでは〈信順〉とか〈帰順〉とか〈帰依〉とか〈信じる〉という意味です。また次の南無は原語がサンスクリット語のナマスで、その音を漢字に当てはめた言葉です。その意味はここでは帰命と同じです」  
**A** 「では帰命無量寿如来 南無不可思議光を現代語に訳すとどうなりますか」  
**D** 「いのちはかりなき仏に帰順し、ひかりはかりなき仏に

帰依したてまつる、と訳せましょう」  
**A** 「では光明無量・寿命無量の内容はどう理解したらいいでしょうか」  
**D** 「法然聖人が寿命には〈能持〉という意味があるといわれています。そうすると、よくたもつ働きを〈寿命〉といえましよう。何をよくたもつのかといえば、ここでは、光明の働きをよくたもつ。光明無量をどこまでもよくたもつ働きを寿命無量と理解してはどうでしょうか。光明という阿弥陀仏の功徳をどこまでもたもたせている働きを寿命無量というのでありましよう」  
**A** 「すると、阿弥陀仏の光はいつの時代にもましまして、阿弥陀仏のいなさらない時はないということなのですね」  
「ええ、もし阿弥陀仏の寿命にかぎりがあれば、千年前の衆生は阿弥陀仏の光明の救いにあずかったけれども、それから千年先の衆生は阿弥陀仏がおられないから救われないうということになりかねません。ですから阿弥陀仏の寿命が無量だから、阿弥陀仏の光明によって、私たちも未来の衆生もお助けをいただくことができるのです」 (了)

ているのである。そして、私はこの言葉をことあるごとに多くのご門徒に語るが、殆どの方が聞き流すだけである。何度も何度も話しても聞き流すだけなので「なぜこんな有難いお言葉を受け入れられないのか」といぶかることが多いが、しかし受け入れられないのが当たり前で、受け入れることは不思議な出来事かも知れない。本願のお言葉も不思議だが、それを信じるようになるのも不思議である。それはとうてい我が知性の力ではない。まさしく大悲の恵みである。「死んで浄土に生まれる」というこの道こそ、現代人の悲惨さを超える救いの光ではないか。ほかに「虚無の死にいたる人生」を超える道が現代の日本にあるだろうか。あるとしても希であろう。

〈死んだら終わり〉と思うのは、顔を洗うときに鏡に毎朝映る身体を「自分」と思い込んでいるからではないのか。しかし、鏡に映る身体を当たり前のように自分と思っているものは一体何なのか。何が、何を感じているのか。それが心であろうが、その心と身体はどういう関係があるのか。この謎は古来から、難問中の難問で、いまだに大いなる謎の儘である。だから「体の死は自己全体の死」と結論づけてはいけなし、実際、そんな簡単に言えるものではない。

# 信心夜話

○お念仏は出そうにない口から出て下さる。

○阿弥陀さんから信心もらうのでなく、阿弥陀さんをもろう。阿弥陀さんから念仏もらうと、思っていたが、念仏が阿弥陀さんであった。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

(『松並松五郎念仏語録』より)

どちらも妙好人の松並松五郎さんの言葉である。

お念仏から照らされると、私の口は毎日何を云っているかと言えば、生活上に必要な事柄を伝える以外は、無内容な言葉や「暑い、寒い」「しんどい、楽や」などの我が身の都合の良し悪しや損得、人様の上の良し悪し、自分をよく見せようとか他者に諂う言葉などで、まさに我執我愛に基づいた言葉だらけ。仏になるようなまことの言葉はこの口から出てきそうもない。そんな私に仏様が出て下さる、それがお念仏。お念仏が出て下さるとは阿弥陀様が出て下さること。これは本当に不思議なことであり、もったいないことである。有難いというもおろかである。

極重の悪人をこそまず助けねばおかないという大悲のお心ゆえに、出そう

もないお念仏が煩惱一杯の我が口から出て下さるのであろう。私が仏法者だからお念仏が申されるのではない。私に求道の心があるからお念仏が出て下さるのではない。どうしてみようもない粗悪な私を見捨てることはできないという大悲深きゆえに阿弥陀様が私の口に出て下さるのであろう。出るはずのない、出て下さる価値など全くない私にお念仏が出て下さる。

にもかかわらず、そのお念仏を非常に軽くしか受け取っていない。おはずかしいことである。

「阿弥陀さんから阿弥陀さんをもろう」といわれる。念仏をいただくことは阿弥陀さんをもろうこと、念仏が阿弥陀仏であること。それは私の思いがそう思われるとか思われなにか、そう感じるとか感じないとかに関係なく、お念仏が阿弥陀仏であり、念仏が出てくださることは阿弥陀さんをいただくこと。今口に現れて下さる南無阿弥陀仏が私を助けたもう阿弥陀仏。

そのことをどれほど身に浸みて感じているかの浅い深いはあろうとも、私の側の感じる程度や思いの程度の浅深に関わりなく、お念仏が阿弥陀様ご自身であるとのこと。松並さんの言葉に「唐辛子は辛いと思っても思わなくても、辛い」とあるのはこのことである。

とかく、「そのようにお聞きします

きません」とよく言うが、私がどう思うか思わないか、そんな自分の思いを大事にしているから、いつまでも仰せがそのまま受け取れない。どう私が思うか思われるか、どう感じているかではない、今この口に出て下さる南無阿弥陀仏様が私を助けに来られている阿弥陀様である。それを聞くばかり、聞き受けるばかりである。私がどう思うとどう感じようと、そのような思いも感情もお助けの障りにはならぬし、役にも立たぬ。今口に出て下さる南無阿弥陀仏様のほかにお助けはないし、お助けに必要なものはなにもない。

「阿弥陀さんから信心もらうのでなく、阿弥陀さんをもろう」という領解と同じ趣旨の松並さんの言葉がある。

○「弥陀の回向のみ名なれば 功德は十方に満ち給う」とある御和讃。弥陀のこの「の」が有難い。「弥陀が回向のみ名なれば」とあれば、弥陀と回向のものと二つになる。別々になるが、「弥陀の」とあるからは、弥陀と回向のものと一つになる、なって、回向なし下さるもの。

南無阿弥陀仏の中に、弥陀のお心、弥陀全体が入っている。それを頂いた私は南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と称え聞くままが、お阿弥陀様が現れて下さる、下されてあるのです。阿弥陀様から阿弥陀様を頂いたのであります。

「私が本をあげます」「私の本をあげます」「私が本をあげます」。これは本をあげます。この場合は本の中に私は入っている、一つである。仏様から仏様を頂きました。

(『松並松五郎念仏語録』より)

阿弥陀さんから阿弥陀さんをもろう、ということはどういうことであるうか。それは南無阿弥陀仏と称え聞くままのところに、南無阿弥陀仏と現れて下さる、その阿弥陀様と一つにならしめられている。いわば阿弥陀様と離れていない事実を知らせていただくことを「阿弥陀様から阿弥陀様を頂いた

## 《春季彼岸永代経法要》

三月二十二日(土)

午後二時始まり

念佛寺にて

の**であります**「と」ここで申されるので  
ありますよう。